

# 絵画と臨床心理学

## ロールシャッハ・テストはインクのしみではない？

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

小川俊樹（おがわ としき）



### Profile — 小川俊樹

1975年、東京教育大学大学院教育学研究科博士課程（実験心理学専攻）退学。茨城大学保健管理センター講師、筑波大学心理学系講師、助教授、教授を経て、2004年の改組により現職。医学博士。専門は臨床心理学、異常心理学、アセスメント心理学。主な著書は、『子どものロールシャッハ法』（共編、金子書房）、『臨床認知心理学』（共編、東京大学出版会）、『投影法の現在』（編集、至文堂）、『心理学概論：学びと知のイノベーション』（共編、ナカニシヤ出版）など多数。

本号の特集は「絵画をめぐる心理学」ということであるが、絵画を考えるうえで密接な関係をもつのは、一般に知覚心理学や感情・感性心理学の分野であろう。臨床心理学と絵画はあまり関係がなさそうに思う人もおられるかもしれないが、意外に深いつながりがある。ここでは臨床心理学と絵画、とりわけロールシャッハ・テストについて考えてみたい。なお、ロールシャッハ・テストは狭義の意味でのテストではないという立場から、ロールシャッハ法と呼ばれることが多いが、ここでは一般的に知られている名称としてロールシャッハ・テストと表記する。

### 心理臨床と絵画

一般に心理臨床家の仕事として、三種類の業務を挙げることができる。心理療法とか心理面接とよばれている業務、心理診断とか心理アセス

メントとよばれている業務、そしてコンサルテーションとか地域援助とよばれている業務である。この中で、心理療法は絵画とは切っても切れない関係にあるといえる。その代表が絵画療法（art therapy）である。すなわち、治療の一環として絵画を描かせ、クライアントの自己表現をうながしたり、あるいはカタルシスを起こさせて直接的な治療効果を期待することもあれば、治療的コミュニケーションや解釈の素材とする間接的な治療効果を期待する場合もある。いずれにしても絵を描くことが、いわば治療である。とくに直接的な治療効果をもたらす例として、画家が自発的に絵画を描くことがしばしば自己治療のひとつでもあるとして、病跡学の立場から多くの研究が行われている（たとえば、ムンクの絵画をめぐる宮本（1974）の研究など）。

一方、心理アセスメントと絵画の関係はいかがであろうか。表は、心理臨床家 1000 名に心

表 心理検査の利用頻度について（小川他，2011）

順位	検査名	利用頻度	順位	検査名	利用頻度
1	バウムテスト	67.1%	11	Y-G	30.2%
2	WISC	50.7%	12	DAP	28.1%
3	SCT	50.5%	13	HDS-R	27.1%
4	WAIS	49.4%	14	SDS	25.3%
5	TEG	46.0%	15	家族画	22.5%
6	ロ・テスト	45.8%	16	MMSE	22.1%
7	HTP	39.4%	17	K-式発達検査	21.2%
8	風景構成法	32.3%	18	MMPI	14.2%
9	ピネー式	32.3%	19	K-ABC	13.2%
10	P-Fスタディ	31.7%	20	CMI	12.0%

理検査の採用状況についてアンケート調査し、326名から回答を得た各種心理検査の使用頻度結果である。日頃の心理臨床の場で当該の心理検査を、「常に使用している」「頻繁に使用している」「適度に使用している」「まれにしか使用しない」「使用せず」の5段階で評定してもらい、「常に使用している」「頻繁に使用している」「適度に使用している」を選択した割合の高さをもって、順位づけしたものである。トップスリーのバウムテスト、WISC（ウェックスラー式成人知能検査）そしてSCT（文章完成検査）は、過去20年間ほとんど変わらず上位を占めている。そして上位20位の中にいわれる投影法が八つ（バウムテスト、SCT、ロールシャッハ・テスト、HTP、風景構成法、P-Fスタディ、DAP、家族画）入っており、トップテンに占める投影法は実に六つもある。日本の心理臨床では投影法がよく用いられているし、好まれているといえる（一方、海外においてはたとえば、米国の調査でもHTPが心理検査として使用されているのに対して、英国では心理検査としてのHTPの利用は少ないことが報告されている。同じ英語圏でも用いられ方には大きな違いがあり、海外との比較においては、文化の違いが考慮されなければならない）。この六つの使用頻度の高い心理検査の中でも、バウムテストは実のなる木を、HTP（House-Tree-Person）は木と家と人を、そして風景構成法は川・山・田など10個の項目を一定の順序で描き加えて1枚の絵に仕上げるもので、いずれも描画法（drawing method）と呼ばれる投影法である。上位20位までには、人物画（DAP）と家族画もあり、描画法の多さが日本では顕著である。幼児・児童から高齢者までと検査対象が幅広く、また短時間で実施可能な点も描画法が好まれている理由であろう。

描画法以外でも、絵画といえば、利用頻度6位のロールシャッハ・テスト、10位のP-Fスタディ（Picture-Frustration Study）も広い意味では絵画を利用しているといえよう。とくに、ロールシャッハ・テストのインクプロットは、いわば一種の絵とみることもできる。しかしな

がら、描画法が描き手の心理的特徴を問題にするのに対して、ロールシャッハ・テストはその逆で、いわば見る側の心理的特徴を問題にすることができる。ロールシャッハ・テストは、インクのみみという訳のわからないものをどのように鑑賞しているかという検査状況に他ならない。色彩や構図など、どのような絵を描くかという視点から美術の教師は子どもの特徴を経験的に把握しているが、どのように鑑賞しているかでも同じように子どもの特徴をつかめるのであろうか。

### ロールシャッハ・テストの誕生

他の心理検査名と同様に、ロールシャッハ・テストとはその創作者であるヘルマン・ロールシャッハ（Hermann Rorschach）の姓を冠したものである。ヘルマンは、スイスのチューリッヒ大学医学部を卒業した精神科医であったが、当時、大学での指導教授であったオイゲン・ブロイラー（Eugen Bleuler）教授が統合失調症という新しい疾病概念を提唱していたこともあり、統合失調症の鑑別診断の有力な方法として、インクのみみによる検査方法を考えたと思われる。1921年に出版された彼のモノグラフの題名「精神診断学（Psychodiagnostik）」は、彼自身の希望ではなかったといわれてはいるが、鑑別診断を強く意識していたのに違いない。

ところで、インクのみみを検査に利用しようという発想はどこから生まれたのであろうか。エレンベルガー（1986）によれば、ヘルマンが若い頃、1900年前後のヨーロッパではクレクソグラフィ（Klecksographie）というインクのみみゲームが流行していたという。これは、インクのみみを見て連想したものを紹介しあったり、詩をつくりあったりするものであった。したがって、インクのみみからの連想が人によってまったく異なるという事実に、ヘルマンは若い頃から気づいていたと思われる。このインクのみみを個人差の測定に利用できるのではないかという考えは他の多くの研究者も抱いており、たとえば世界で初めて知能検査を開発したビネ（Binet, A.）も、当初インクのみみ検査を

用いようとしていたといわれている。また今日まで、世界中で多くのインクのしみ検査が公表されている。

しかし、あまたあるインクのしみの中で、ヘルマンの作成したインクのしみが抜きん出ている。それは数多くの試作品の中から、一説には15、16枚といわれているインクのしみを選んだ彼の慧眼によるものであるが、その基にあるのは彼の芸術的センスである。ヘルマンが19歳の時に亡くなった、高校の美術教師であった父親の血筋を引いていたのかもしれないが、彼は青年期から水彩画を能くし、またその技量も優れていたといわれている（なお、医学生であったときの解剖図なども含め、彼の描いた作品は、スイスのベルンにあるロールシャッハ・アーカイヴス博物館で見ることができる）。そのため、今日私たちが見るロールシャッハ・テストのインクのしみは、エクスナー（Exner, J., 2003）によれば、ヘルマンがその優れた芸術的センスを活用してももとのインクのしみを潤色し、精緻化したものであるという。その意味では、ロールシャッハ・テストはインクのしみというよりも、一つの芸術作品であるということができよう。事実、ヘルマンは当初インクの

しみ（ドイツ語で *kelcks*）と呼んでいたものを、絵（ドイツ語で *bilder*）とか、図版（ドイツ語で *tafeln*）とか、図（ドイツ語で *figures*）と呼び名を変更している。

### ロールシャッハ・テストとは何か

ロールシャッハ・テストがインクのしみというよりも一種の芸術作品ではないかということを描いたが、インクのしみと聞いて誰しも真っ先に思い浮かぶのは墨滴、すなわち黒である。クレクソグラフィーとして今日残されている作品も黒色作品である。ところが、ロールシャッハ・テストでいうインクのしみは黒色だけでなく、赤や青、黄や緑といった色彩も加えられている（ロールシャッハ・テストの図版は、心理検査の倫理基準から国際的に公開しないことになっている。ここに紹介したのは、3枚1組のスペインのインクのしみ検査（*Laminas Projectivas*）の1枚である）。ヘルマンに先だってインクのしみを学位論文の研究テーマに選んだシーモン・ヘンス（Szymon Hens）もすべて黒から成る8枚の図版を採用している。インクを垂らしてできた模様にも色を加えて絵とした理由はどこにあるのであろうか。一説には、同じ

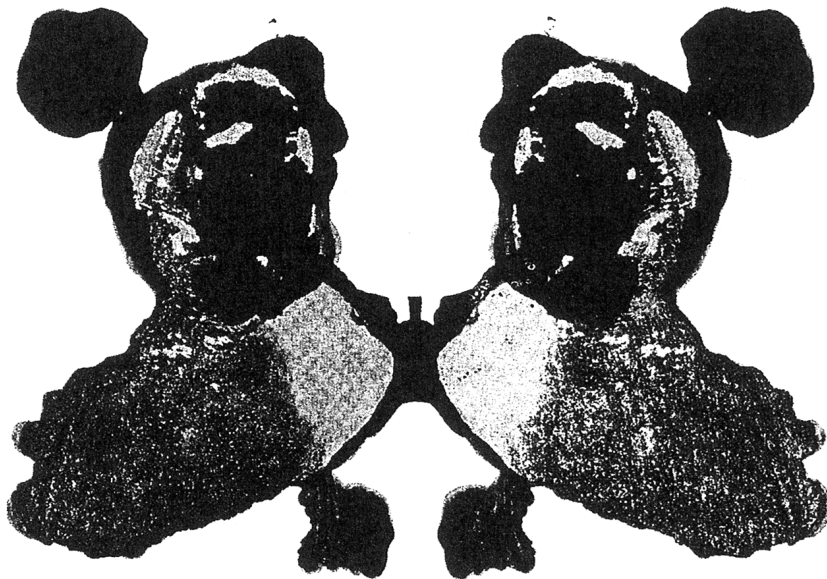


図 スペインのインクのしみ検査

精神科病院に勤務していた同僚ファンクハウザー（Fankhauzer, E.）の感情と色彩の関係をめぐる研究に強く印象づけられたとの指摘もあるが、それだけであろうか？

ところで、ヘルマンのモノグラフの題名には副題がついている。ヘルマン自身の意向としてはこちらが本題となるべきものであったとされるが、それは「ある知覚解釈的実験（無作為の形を判断させること）の方法と結果」というものである。ここでの知覚とは視知覚に他ならない。ロールシャッハ・テストはまずもって見なければ始まらないのである。視覚に障害のある人にこのテストは実施できないし、なによりも目をつむってしまったら検査は不可能である。この事実、実はロールシャッハ・テストで問題としているのは、視覚体験そのものであるということを示唆している。色彩は視知覚に固有の様相であり、聴覚や嗅覚には認められない（もっとも、通様相現象では聴覚に色彩体験が生じることになる。興味深いことに、ヘルマンの医学博士論文は「反射幻覚とその類似現象について」というものであるが、反射幻覚とはある感覚刺激により異なる感覚領域に生じる幻覚をいい、まさしく通様相現象そのものである）。

ヘルマンは、図版に何を見たかという内容よりも、どのように視覚刺激体験しているかという形式を重視し、視知覚の様相を採用した新たなスコアリング・カテゴリーを考案した。それらは決定因と名づけられたが、モノグラフ発表時の決定因は形態反応、運動反応、色彩反応の三種類であった。形態反応は形の把握であり触知覚でも可能である。運動反応は、対象の動きであり聴覚でも生じるが、ヘルマンは筋緊張を感じさせる反応と定義して姿勢や状態も含んでおり、その意味では運動感覚や平衡感覚に通じた体験である。色彩反応は前述したように、一般的には視知覚に固有の様相である。

しかし、現在の決定因は、ヘルマンが考えた決定因カテゴリーに二つ追加されて、五つになっている。これは、モノグラフの出版に際して印刷上のミスで本来の図版にはなかった色の濃淡が生じてしまったことに起因している。刺激

の濃淡に、材質感という知覚体験と、遠近や拡散という三次元知覚体験を生むことになったのである。材質反応は触覚に、そして立体反応は聴覚、触覚に認めるものである。このように考えると、視知覚ほど多くの感覚様相を含むものではなく、ロールシャッハ・テストはそのような視知覚の特徴を利用して、どのような様相に注意を注いでいるかを明らかにしていると考えられる。

### おわりに

ロールシャッハ・テストという絵を決定因などの感覚様相から見ていく、このような姿勢は、絵画鑑賞時の、いわば評論家の批評家の鑑賞といえるかもしれない。しかし、ロールシャッハ・テストほど多くの反応を喚起させる絵はないのではなかろうか。何に見えるのかがまったくわからない絵ではテストにはならないだろうし、また特定のものにしか見えない、つまり反応を一つしか生まない絵でも役立つまい。そこそこのバラエティをもったものに見えるという絵がロールシャッハ・テスト図形であり、それはヘルマンの芸術的感性と科学的思考とが生んだ産物である。なお、ロールシャッハ・テストをめぐっては、知覚課題と見るか、言語課題と見るかの二つの立場があるが、本稿では知覚課題としての立場でロールシャッハ・テストを考えてみた（小川，2008）。

### 文 献

- エレンベルガー, H. (1986) 「H.ロールシャッハの生涯と業績」 K.W.バッシュ 編/空井健三・鈴木睦夫 共訳『ロールシャッハ精神医学研究』みすず書房
- Exner, J.E. (2003) *The Rorschach: a comprehensive system*. New Jersey: Wiley.
- 宮本忠雄 (1974) 「太陽と分裂病：ムクの太陽壁画によせて」 木村敏 編『分裂病の精神病理 3』東京大学出版会
- 小川俊樹 編 (2008) 『投影法の現在』至文堂
- 小川俊樹・岩佐和典・李貞美・今野仁博・大久保智紗 (2011) 「心理臨床に必要な心理査定教育に関する研究」研究助成報告書